

“困った子”と呼ばれるあの子は、  
本当は“困っている子”かもしれません・・・

# つらいのに頼れない子どもたちのために ～親・学校・地域の大人ができること～

受援力：助けを求め、支え合う社会へ



## 第1部 講演



聖路加国際病院にて産婦人科研修後、名古屋大学大学院にて医学博士号取得。ドイツ・イギリスでの臨床経験を経てハーバード公衆衛生大学院留学。国立保健医療科学院、神奈川県をはじめとした官公庁や多数の自治体で母子保健領域の公共政策提案に携わり、2019年より神奈川県立保健福祉大学大学院ヘルスインノベーション研究科教授。著書に、『「時間が無い」から、なんでもできる!』（サンマーク出版）、「ママドクターからの幸せカルテ—子育ても仕事も楽しむために」（西村書店）、『つらいのに頼れないが消える本—受援力を身につける』（株式会社あさ出版）、『頼る』スキルの磨き方』（KADOKAWA）『頼るスキル 頼られるスキル』（角川新書）ほか多数。4女2男の母。

吉田 穂波(よしだ ほなみ) 産婦人科医師、医学博士、公衆衛生学修士  
神奈川県立保健福祉大学大学院ヘルスインノベーション研究科教授

## 第2部 パネルディスカッション

「つらいのに頼れない子どもたちのために、私たちにできること」

北上市教育委員会  
スクールソーシャルワーカー  
藤田 聖子 さん

北上市立南小学校  
養護教諭  
齊藤 里子 さん

KINOスクール  
代表  
藤村 千鶴 さん

にこにこ助産婦  
助産師  
八重樫 重子 さん

岩手県立中部病院  
臨床心理士/公認心理師  
小野寺 夏未さん

【日時】 令和8年9月5日(土) 10:30~12:30(10:00開場)

【会場】 日本現代詩歌文学館(北上市本石町2-5-60)

【対象】 地域住民・保護者・保健・医療・福祉・教育関係者

【定員】 150名(先着順)

【参加費】 無料

申し込み：右のQRコードを読み取って申込フォームを送信してください。

お問い合わせ：✉ kangokyukai.kitakami@gmail.com



主催：岩手県看護協会北上支部 後援：北上市・西和賀町・北上市教育委員会・西和賀町教育委員会

# 「つらいのに頼れない」子どもたちを支えるために：受援力でつながる支援の輪

声なきSOSを  
閉じ込める4つの障壁



「頼れない」のは個人の性格ではない。子どもがSOSを出せないのは、周囲の大人や社会の構造的な孤立が連鎖している結果であり、環境側の課題として捉える必要があります。

視点の転換：  
評価から理解へ



大人の基準で表面的な「問題行動」を指導・矯正の対象とする視点を捨て、行動の裏にある「苦しみに寄り添い、支援の手を差し伸べる理解の姿勢へと転換します。

幸せを呼ぶ  
「受援力(じゅえんりょく)」の連鎖



大人の背中が、子どもの鏡になる。大人が自ら「助けて」と言う姿を見せることで、子どもに「助けを求めるといいんだ」という安心感が生まれ、子ども自身のSOSを出す力が育つ無限のループ(連鎖)が生まれます。

受援力とは「助けを求め、支えを受け入れる力」。助けを求めることは弱さの証明ではなく、自分と大切な人を守るための「スキル」であり「強さ」です。

誰も取り残さない  
「面」の支援ネットワーク



大人が「助けて」と言える社会が、子どもの安心を作り出す。専門家の垣根を超え、顔の見える関係性を築くことが、地域全体で子どもを守る基盤となります。

## ごあいさつ

私たち岩手県看護協会北上支部は、医療機関や行政、福祉施設などで勤務する、看護専門職の職能団体です。

自らの職能を育て看護の質を向上することと、地域全体の健康と福祉の向上に貢献することを目指し活動しています。

昨今、不登校やいじめの増加や若者のメンタルヘルス不調など、子ども達が大きなストレスにさらされていることが危惧されています。

本シンポジウムは、私たち看護職を始め、親、学校、地域でできることを考えたいと企画しました。親や大人からしたら、「困った子」と呼ばれる子どもは、実はSOSを出すことができず「困っている子」であるという転換が必要ではないでしょうか。

なぜ子どもはSOSを出せないのか。

子どもの行動の背景にある苦しみを理解し、子どもが「助けて」と言える社会のあり方をみなさんと考えたいと思います。

## 看護職のみなさま



日本看護協会の「看護者の倫理綱領」において、看護職は、生涯学習(自己研鑽)、社会・地域への貢献が責務として示されています。私たちは共に活動する仲間を募っています。活動に興味のある方は、右側のサイトをご覧ください。

